高齢者・ヘルバーと、高齢者・ケアマネーの言葉の比較

会話のなかでの「思考様式」と「経験」について

S・ブルーナー、M・ホワイト＆D・エプストーインといった二つの思想・認識様式の対立的な図式から探っていく。

つまり、高齢者・ヘルバー関係と高齢者・ケアマネー関係の会話に																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
### 表1 「高齢者に対するヘルパーとケアマネの言葉の対比」

<table>
<thead>
<tr>
<th>業務上の会話の必要性</th>
<th>ヘルパーの言葉</th>
<th>ケアマネの言葉</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>無し</td>
<td>有り（作業の確認のため）</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>話す内容</th>
<th>目的</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>積極的な目的無し</td>
<td>雑談</td>
<td>計画に関する事</td>
</tr>
<tr>
<td>主にヘルパーまたは高齢者（その他、家族、友人等）</td>
<td>高齢者のみ</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 表2 「ヘルパーまたはケアマネに対する高齢者の言葉の対比」

<table>
<thead>
<tr>
<th>会話の必要性</th>
<th>ヘルパーに対する言葉</th>
<th>ケアマネに対する言葉</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>無し</td>
<td>有り（ケアマネからの質問への応答や計画についての意志伝達）</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>話す内容</th>
<th>目的</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>積極的な目的無し</td>
<td>雑談</td>
<td>日々の苦労や努力についての経験談（エピソード）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>テーマ</th>
<th>主導権</th>
<th>展開</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>高齢者とヘルパーそれぞれ</td>
<td>高齢者のみ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>速い（持ってテーマが多い）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>話す方法</th>
<th>通じた話し方</th>
<th>姿勢</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>通じた話し方</td>
<td>丁寧な話し方</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>職務の状態</th>
<th>充分面接（就職なら適宜ヘルパーを用いて）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>室内の物</td>
<td>人（ケアマネ）と書類</td>
</tr>
</tbody>
</table>
「高齢者-ヘルパー」と「高齢者-ケアマネ」の言葉の比較

は、特徴的な傾向を取り上げて理解することを優先し、対立的な図式を示した。

【物語的な思考モデル】対【論理科学的思考モデル】について

の次元に、は、あるかも確認しておるが、「論理」

科学的な思考様式も、物語的な思考様式も、人

の思考様式が、歴史的

生産のなかで作られてきたようであり、あるかも完成した完全的な実

体として扱うのは本来はできない。この二つの思考様式について、

ホワイトは、「プラーナーの理論」から延長しているが、アマネは、

この二つを思考の方向性や志向性のよう、取り扱って、より発想的

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式的喚起するに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応させるに、その表現を、一つの思考様式、

論理科学的思考様式を構成し、自己展示の強度があり、物語的思考様

式を、呼応せる
アセットメント上の特徴は、高齢者の一貫性を除き、通常の生活に必要とされる能力を欠いている点である。

したがって、この特徴は、アセットメントの基準が、高齢者の日常生活における能力を考慮することで、高齢者の問題を理解するための基礎となる。

このアセットメントの利用者は、高齢者の日常生活における能力を評価することにより、その生活における必要なサポートを提供することができる。

さらに、このアセットメントは、高齢者の日常生活における能力を評価することで、適切なサポートを提供することができる。

したがって、このアセットメントは、高齢者の日常生活における能力を評価することで、適切なサポートを提供することができる。
「高齢者·ヘルパー」と「高齢者·ケアマネ」の言葉の比較

一方、物語思考様式は、「経験」の次元において、「生まれた経験の特殊性に偏重する」とホワイトは言っている。高齢者とヘルパーとの会話が、弾むように進んでいくときには、まさにこの状態で、それぞれの経験的エピソードが自ら自らが与えられる。それは、高齢者の言葉に応じるかのようなかわらない、あるいは、他者の言葉を置いたも無意識のうちで、それに選択しているもの、つまり、高齢者のエピソードを誘発するための内容である。それ自体の内容のなかの話が、単純な物語思考においては、その言葉を選んだほどよいことである。あくまで、その言葉自体が、経験的であるというエピソードの選択にはなっており、口伝えに誰を通じて伝わるかについては、徐々に、さらにそう考えられるときの会話は、促進的に展開していくことになる。家族の場合には、普段から何度も同じ話を聴かされ習得しあって、同じ経験を共有しているために口にする必要がなかったり、それに比べると、ヘルパーは、家族の過去の経験も含めてもあるために、何回かの言葉を促すことができる。また、決まった段階を完遂させるためにも、会話の腰を折って、気まずい関係になることは好ましくない。

高齢者とヘルパーの会話は、客観的には物語思考様式にそった話で、経験的で言葉表現があるなど、単純な物語思考に比べて、より複雑な物語思考である。それにより、高齢者の言葉を理解するためには、言葉を理解するために、他者の言葉に対する、ある意味で無責任に肯定した段階を促すことができる。また、決まった段階を完遂させるためにも、会話の腰を折って、気まずい関係になることは好ましくない。
ケアマネの論理による言葉と高齢者の経験による言葉の背反

もと一度、ケアマネと高齢者との会話に戻ってみると、ケアマネが論理科的な思考様式にそってディスコースを構成しているのに対し、高齢者は、物語的な思考様式にそったディスコースで応じている。つまり、ケアマネが、リハビリの必要性を必然的に導かれる理論にたちた言葉を投げかけるのに対し、高齢者は、自分自身の苦労や苦痛の経験的なエピソードを展開していける。

ケアマネの言葉はもっとも、その論理の基盤からでは反論しようがない。健康と長生きのために介護予防をすべきであり、リハビリをすべきであると言っているのではあるが、それも高齢者の個体の心身のコンディションに対応して必然性をもって提案されている。さらに、この否定しようのない論理は、論理的な事実を超えて、倫理的な負債を押しつけることがある。つまり、介護予防の論理、介護予防やリハビリへのメニューを、倫理的な負債を含めた有能の有無が生じている。そのマイスを今までのうちに取り戻すべき兆しが生じているので、そのマイスを今今のうちに取り戻すべき兆しが生まれている。

ということから、介護予防を必要とする人は、つまり要介護の人は、という倫理的な非難にもなり、そのマイスを今今のうちに取り戻すべき兆しが生まれている。

ところが、要介護の人は、ケアマネの言葉を引き続き受け入れ、これほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた、と様々な経験的なエピソードをもってこれほど苦痛に耐えてきた。
「高齢者-ヘルパー」と「高齢者-ケアマネ」の言葉の比較

高齢者とヘルパーとの会話では、業務上必要になる会話から、雑談へと連続的に移っていくことがしばしば確認される。ある会話を過去の会話を読むと、それが「高齢者-ケアマネ」の論理的な言葉を誇示してしまう。これによって、かななりの意味があるでしょう。

しかし、ケアマネは、撤回しない。ケアマネは論理-科学的思考の思考様式にすっいてくるからである。論理-科学的思考様式から生まれる言葉は、ある知識に至るとして支えており、それができるほど努力がなされているのかかもしれない。それでも、非難している言葉（高齢者に向かう）も撤回するだろう。

高齢者とヘルパーとの会話では、業務上必要になる会話から、雑談へと連続的に移っていくことがしばしば確認される。ある会話を過去の会話を読むと、それが「高齢者-ケアマネ」の論理的な言葉を誇示してしまう。これによって、かななりの意味があるでしょう。

C氏
C氏は「余談でいっしょに生活していると言え」。

D氏
D氏は「余談でいいしょに生活していると言え」。

D氏
D氏は「余談でいいしょに生活していると言え」。

例2:
例2:

二宮
二宮が家の中の虫に名前をつけた話をする。

Dヘルパー
Dヘルパーは「余談でいいしょに生活していると言え」。

「高齢者-ヘルパー」と「高齢者-ケアマネ」の言葉の比較

高齢者によって経験を再現し、その感覚を再現する。その場で自身の苦労や苦痛を再現するのである。物語的な思考様式から生まれる言葉は、知覚や印象という感覚の再現性に偏値が置かれ、それを語ることによって苦労や苦痛を体験することができ、将来の実現性に偏値があると考える。それは、未来の実現性を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができるからである。それによって苦労や苦痛を再現することができ
参考文献

小野田貴夫「高齢者とルールとの会話の特徴（第二回社会言
学発表論文集）」 常葉大学短期大学紀要 36号、1995年。

小野田貴夫「高齢者・ルールとの会話の特徴について」 常葉学園短期大学紀要 40号、1998年。

小野田貴夫「高齢者とルールとの会話」 常葉学園紀要 40号、1998年、

J・S・ブルーナー『可能世界の心理』（上書房2000年）

M・ホワイト『物語としての家族』（金剛出版2002年）